

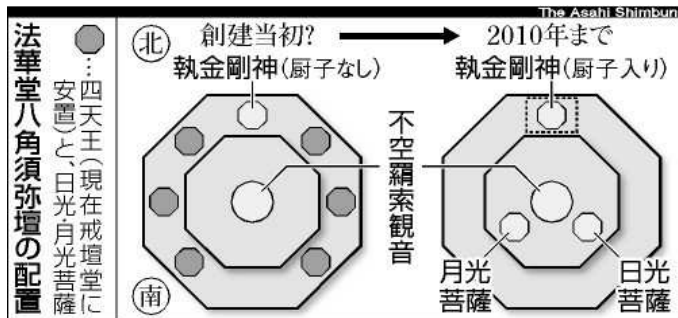
信心の浅い友人は、仏教は敷居が高くて苦手だと言います。〇〇如来に、△△菩薩、□□天など難しい読みをする尊格がたくさん登場して、互いの関係が飲み込めないことが苦手の原因のひとつです。深澤先生のレジメに載せられた日光菩薩・月光菩薩は柔和で慈愛に溢れた表情をしています。実はこの二体、梵天と帝釈天であると言います。近年の年輪年代法を用いた法華堂や八角須弥壇の調査から、成立年代が明らかになり、その設立趣意から考えると二体は不空羂索観音菩薩を中尊とする脇侍と考えられると言うのです。

帝釈天・・・「私、生まれも育ちも葛飾柴又です。帝釈天で産湯を使い・・・人呼んでフーテンの寅」でお馴染みですが、どんな尊格でしょう。古代インド神話の英雄神・インドラが仏教に取り入れられた尊格で、インドラは宿敵「阿修羅」と尽きることのない戦闘を繰り広げます。友人の微かな記憶の中にある帝釈天も、右の絵の『百億の昼と千億の夜』に描かれた軍神の勇ましいイメージです。



帝釈天 百億の昼と千億の夜(萩尾望都)より

塑像製の二体の菩薩は2011年に開館された東大寺ミュージアムに展示されるまでは、法華堂八角須弥壇の上段に安置されていました。しかし、不空羂索観音が3.6mの大きな乾漆像であるのに対して、菩薩像は僅か2m余りの塑像であることから、どこからか持ち込まれた客仏であろうと思われていました。また、左右対称に作られるはずの二体の菩薩が対称でなかったり、通常菩薩は履かないとされる沓を履いていることなどおかしな点がありました。江戸時代(1705年)に編纂された「東大寺諸伽藍略録」に初めて登場するまで、この二体がどう呼ばれていたかも分かっていません。さらによく見ると、月光はその衣の下に鎧を着けているように見えます。この二体の菩薩像と同サイズの四天王像が戒壇堂にあります。中門堂から戒壇堂に移された記録がありますが、最初はどこにあったかこちらの四体も分かっていませんでした。ところが、1996年以降の法華堂八角須弥壇の調査で、下段に七体分の台座跡が確認され、いずれも幅83センチ前後の八角形であることが判明しました。四天王像四体、日光・月光菩薩像二体と執金剛神像はみな塑像製なので、像の心棒が八角形の台座に固定されています。須弥壇の台座跡



法華堂 須弥壇の配置(朝日新聞)

5度にわたる渡航失敗の苦難を経て、唐から仏教の戒律を伝えるために、鑑真は日本にやってきました。右の写真は、東大寺の僧、良弁に經典の借用を申し入れた手紙です。弟子の代筆とする説もありますが、カリスマ的指導者だった師匠の代筆は相当の緊張感があるはずですが、その割には自由に書かれていて、鑑真本人の直筆と思えます。手紙の3、4行目にある4つの「部」の最終画の長さが、余白に配慮してそれぞれ異なり、盲目の人では無理な芸当だと思われる。

奈良時代に書かれた『唐大和上東征伝』の記述から、渡航苦難で失明したことの根拠とされていますが、その『唐大和上東征伝』には、僧、良弁が鑑真を大仏に案内し、これほど巨大な大仏が唐にあるかを問うくだりもあります。既に失明して目が見えないなら、良弁の問いはひどく嫌味な行動で不自然なものになってしまいます。鑑真の孫弟子である豊安が835年に書いた史料には“..春秋七十有七。稍生難視之想。..”とあるので晩年には視力を失っていたようです。

